

## 病気と社会 —— イギリスにおけるペスト

日 野 秀 逸

### 時代を象徴する病気

人間が病気を克服する歩みとしての医学の歴史とともに、病気が人間におよぼした影響の歴史は社会的にみて重要である。一連の病気は人間（文明）の発展にブレーキをかけたり、逆にアクセルをかけたりする。無論、病気が個々人の福祉に悪影響を与えるということは一般的にいえる。しかし、社会のレベルでみたときに、ある病気が経済構造や政治形態や思想の前進にとって、あたかも触媒のような役割を果たすことがある。

一般に人類はその時代を特徴づける病気と手を携えて歩んで来たと言えよう。ローマ帝国時代から中世（14世紀まで）を通じて、レプラ（ハンセン氏病、癩病）は神の下した罰としての病気というキリスト教的疾病観の作用を受けつつ、また中世の閉鎖的社会とキリスト教の圧倒的支配という二重の閉塞状態を象徴する病気であった。イギリスについて言えば、1066年（Norman conquest）から3世紀のあいだレプラを最も恐れた。レプラは死亡率4～5／1000以下である。しかし外貌の変化が恐れられ、神の重い罰を受けたものとして患者は苛酷な扱いを受けた。

15世紀末から16世紀の大航海時代とルネサンス時代を象徴したのがコロンブス等によってヨーロッパにもたらされた梅毒である。産業革命と急速な都市化を象徴するのが結核であり、さらに現代は癌と精神疾患の時代といえよう。21世紀はいかなる病気によって象徴されるのであろうか。

## 黒死病イギリスに来たる

ペストの病原体は1894年にフランスのイエルサン (Alexander E. Yersin 1863-1943) によって発見された細菌 (*Pasteurella pestis*) である。この菌は患者の血液中からノミ (*Xenopsylla ceophis*) によって媒介されて伝染する。このノミは、アジア原産のアレチネズミ類を第一次宿主とし、さらにクマネズミやエジプト原産のネズミ (ラトゥス・アレクサンドリヌス) などの人家に棲むネズミを経て、人間に流行を引き起こすと考えられている。クマネズミ類はヨーロッパの内陸部やイギリスなどには中世まで棲息していなかったと考えられる。これらのネズミが、或いは元帝国のヨーロッパ侵入、または十字軍による中近東との接触によってヨーロッパにもたらされ拡散し定着した。

ペストは紀元前3世紀以来、満洲北部周辺、中近東において風土病のように局所的な流行をくり返していたが、14世紀の大流行は、その規模、死者の数、社会への影響、において隔絶した巨大なものであり、特に黒死病として独自に扱われる。

黒死病がイギリスに到来したルートをたどろう。

ヨーロッパまでの径路については、不明な点も少なからずのこされているが、ジェノヴァの植民地でバルト海に面したカッファの守備隊がトルコの侵入によって海路ジェノヴァへ撤退した。この際にトルコ部隊が東方からペストをもたらし、イタリアにもちこまれたのであろう。1346年から47年の冬のことである。ジェノヴァは国際的交易センターであり、ここから各国にペストが拡がることになった。イギリスには、1348年6月にドーセットの港町メルコムにフランスからもたらされ、サマーセット、ブリストル、グロスター、オクスフォードとひろまり、9月にはロンドンに達した。ピークは1349年4月から5月であった。<sup>1)</sup>

## ヨーロッパ経済の展開

アラブ勢力の侵入やスカンジナビア人、スラブ人の西ヨーロッパ侵入は10世紀前半には食い止められ、人口の増加が開始される。11世紀には十字軍の遠征をはじめ、ウィリアム公に率いられたノルマン人のイングランド征服、等々西方キリスト教世界が積極的な拡張運動を行ったが、「こうした企ては、11世紀の諸特徴の一つである高い出生率がなかったならば、明らかに不可能だったであろう」。<sup>2)</sup>

人口の増加は経済活動に大きな影響を及ぼした。農業においては、開墾と築堤が豊富な労働力によってヨーロッパの各地ですすめられる。ピレンヌによれば、ローマ時代から11世紀まではヨーロッパの耕地面積はほとんど拡張しなかったのが、「人口の増加が、こういった非生産的な土地を耕地に変えることを可能にした時から事情は全く変わってしまった。大体紀元1000年頃から、拡大の一途を辿りながら12世紀の末頃まで続くであろう開墾の時代が始まる。ヨーロッパは住民の増加によってヨーロッパ自体を拓殖したのである」。<sup>3)</sup>

農業経済の発展は商業にも刺激を与えた。また人口の増加は農業生産から離れて商業に専念する人間の増加につながった。商品経済の浸透は西ヨーロッパの封建性を揺すぶることになった。総じて、人の移動性が高まり、活動的になり、社会の可塑性が高まった。ペスト伝播のルートについては問題が残されているが、もともと伝染病は人間の交通に伴って拡がるものである。黒死病を準備し、実際に拡げた、当時の政治的、経済的条件自体がヨーロッパ中世の動揺をもたらしつつあったことがらに他ならない。

## 黒死病とイギリス経済

黒死病が経済に与えた影響は、人口の減少という労働力不足に帰着する。イギリスの人口は1066年から1300年までは人口が着実に増加した。特に13世紀には急速に増加した。1086年の人口は125万人と推測される。1300年の英国人口

は350万人から500万人の間、平均をとっておよそ420万人程度であった。

ちなみに当時の都市人口は、ケルンが3万、リューベックが2万5千、フィレンツェが10万、ロンドンが3～4万であった。こうした都市人口は1348年のペスト流行によって突然に激減した。都市は城壁に囲まれた狭い地域に人口が密集しているため、ペストの犠牲は農村部よりも大きかった。フィレンツェでは人口が3分の1に減少した。イギリスでは人口が半減したともいわれている。<sup>4)</sup>

すなわちイギリスの人口は1380年には250万人に減少した。特に1348—50年に大量の死者が出た。ペストによる死者数を計算することは不可能に近い。しかしペスト流行以外にこれといった変動要因が認められないとすれば、170万の人口減の大半をペストによるとみて大過はなかろう。ヨーロッパ全体では3000万程度、中国やアラブ世界を含めておよそ7000万の死者が出たものとみられる。<sup>5)</sup>

イギリスでは、1665—6年にロンドンペストとして知られている大流行があった。この時にロンドンに留まって、克明にペスト流行の実態を記録したのが、ダニエル・デフォーであり、その記録が「疫病流行記」である。この中でデフォーは、比較的系統だった死亡記録が当時のイギリスに存在していたことを記している。また、ジョン・グラントがこの死亡記録を素材にして、1662年に「死亡表に関する自然のおよび政治的諸観察」を発表している。14世紀のペスト流行と条件は異なるが、17世紀の記録をもとにして類推するとイギリスの人口の40%位が失われたとみなすことができよう。

一般的な問題として、農民（農奴）の移動性が高まった。ペストから逃れるために、地主、領主の制止を無視して遠距離に及ぶ移動がなされた。農奴の移動は、定住と定職を前提とする封建的秩序を揺るがすことになる。

さて黒死病による人口の減少は、12世紀以来進行していたマナー（封建的土地所有にもとづく領主の大土地所有のもとでの所領経営組織）の解体を一挙に進めたという意味で触媒となったのである。農具の改良や三圃農業や水力利用などによって農業生産力は9世紀から12世紀まで飛躍的に増大した。これを背景にして領主たちの中に、直営地で農奴にさせていた強制労働を貨幣地代

で代納させる者が出てきた。こうした金納化は12世紀の間に進行していった。しかし、13世紀の人口急増は、農奴の間の競争を強化し、より悪い条件で働かざるをえなくした。かくして14世紀の始めには、人口の増加と生活水準の低下が農奴たちの間で一般的になった。人口増加は14世紀に入ると緩やかになってしまった。ふたたび耕作賦役を貨幣地代に変えるようになってきた。この変化を急速に進めたのが黒死病であった。

マナー解体のプロセスをペストと関わらせて辿って見よう。このために、黒死病に続くペスト流行をみておこう。イギリスでは、1361年にもペストが流行した。ここでは、黒死病に感染しなかった人や1350年後に生まれた人が、免疫を持たないために主たる犠牲者になったと考えられる。1350年頃に生まれた者が当時の通例の就業年令に達した時にペストでやられたのである。また、1361年に乳幼児が大量に死んだのである。かくして、14世紀の2度のペスト流行は、1350年代、1360年代、1370年代にまたがって労働力不足をもたらしたのである。<sup>6)</sup>

深刻な労働力不足は、領主の直営地を耕す農奴の不足であり、領主たちは農奴ではなく、賃労働者としての農業労働者を雇うようになっていった。また、他方では、領主が農業経営から手を引いて、土地を他人（借地農へ）に貸してしまい、借地農が農業労働者を雇って農業経営にあたるという形も増えていった。こうした動きは1381年の農民の反乱（ワット・タイラーの乱）以後、いっそう進展した。ついでに言えば、1381年の反乱は、黒死病による死亡率の高かった地方に主として発生している。

トレヴェリアンはこの間の事情を生き生きと我々に伝えている。「王国の住民の3分の1、あるいはもしかするとその半ばが、2年足らずのうちに疫病でたおれたとき、イングランドの一般の村々の社会経済的状态はどのような影響をこうむっただろうか。……つい先ごろまでは土地入手の渴望をみたすのが困難だったのに、今度はそれを耕す人間が不足した。農地価格はさがり、労働の価格は一躍上昇した。マナー領主は減少した農奴数をもってしては、もはやその直営地を耕作することができなかつたし、しかも一方では開放耕地の地条保有地が、それを耕す家族が疫病にたおれたため、領主の手に多数もどってき

た。……農民一人当りの地条保有数は、地主のいなくなった保有地をあわせることによってふえた。そしてこのように前よりも広い土地を保有する農奴耕作者は、雇用労働を使用して、事実中産階級ヨーマンとなった。……一方土地をもたない自由な労働者は、この一般的な労働力払底のうちにあつて、直営地の執事からであれ開放耕地の耕作者からであれ、以前よりはるかに高い賃金を要求することができた。」<sup>7)</sup>

かくして、イギリスにおける資本主義的農業が展開されることになるのであるが、この封建的経済から資本主義的経済への巨大な歩みが、ペストによって大きな加速を受けたことは確かである。そして、領主層と、借地農から地主や羊成金になりあがった者が、ジェントリー層となり、貴族とともにイギリス資本主義の支配階級であるジェントルマン階級を形成し、都市上層部がさらに支配階級に加わって行くのである。

イギリスの中世から近代への脱皮にとって黒死病、ペストは恐怖をともなう産婆であつたといいうるであろう。

## ペストと思想・差別

病気が思想に及ぼす影響も注目に値する。黒死病のさいにイギリスでみられたのは、まず当時の思想界の絶対的存在であつたキリスト教への不信である。ペストを恐れて教区の牧師が逃げ出してしまった。14世紀の教会あるいは修道院は、次第に大学によってその地位を脅かされていたとはいえ、医学の中心でもあつた。その教会が最も医学的知識と治療する能力とを必要とされたときに、無能と無責任を露呈してしまつたことは、深刻な威信の低下をもたらした。ここから、一方では、17世紀のロンドンにおけるペスト流行のさいにサミュエル・ピープスが書き残した日記にみられるように、刹那主義、享楽主義、総じて道徳的アナーキズムへ向かう者が出てくる。イタリアにおいて黒死病のさいにボッカチオがデカメロンで表した精神世界である。

他方ではキリスト教の改革へと向かう一団が現れる。彼らはペストの神の怒りと捉え、信仰のありかたを反省した。自らを罰することによって神の怒りを

他の人々から自分にむけさせて、他者を救うためのスケープ・ゴートになろうとした。こうした傾向の代表的存在が鞭打ち苦行者であり、自らの上半身を血まみれになるまで鞭打ちつつ行進したのである。そして皮肉なことに、「動きまわる鞭打苦行者たちの行列がおそろしい病気の最良の伝播者となった」。<sup>8)</sup> 黒死病の時期に始まるキリスト教批判と改革運動はジョン・ウィクリフと彼の支持者たちロラーズの運動に、まとまった教義と組織的な行動を見いだす。彼を中心として、聖書の英語訳が黒死病の大流行の最中に完成され、キリスト教を民衆に近づける巨大な力となったのである。

ウィクリフ、ジョン・ボール、ワット・タイラーたちの思想と行動は、精神面での近代を準備したヤン・フス、マルチン・ルターらの宗教改革へとこだましてゆく。まことに黒死病、ペストの影響は深く広いと言わざるをえない。

注：

- 1) F. F. Cartwright, *A Social History of Medicine*, Longman, London, 1977, p. 62
- 2) アンリ・ピレンヌ, 佐々木克己訳, 中世都市, 創文社, 1970, 68ページ
- 3) 同上, 69ページ
- 4) フレッツ・レーリヒ, 魚住昌良・小倉欣一訳, 中世ヨーロッパ都市と市民文化, 創文社, 1978, 97 - 99ページ
- 5) 村上陽一郎, ペスト大流行, 岩波書店, 1983, 122 - 132 ページ
- 6) Cartwright, *op. cit.*, p. 59. pp. 64 - 66 E. A. リグリュイ, 速見融訳, 人口と歴史, 筑摩書房, 1982, 87 ページ
- 7) トレヴェリアン, 藤原浩・松浦高嶺訳, イギリス社会史1, みすず書房, 1971, 12 - 13ページ
- 8) レーリッヒ, 前出, 99ページ